



令和6年度 幼児教育研修（安全・危機管理）

「子どもの安全を守る保育

ー子どもの成長発達から理解する事故、ケガについてー」

日時：令和6年6月18日（火）15:00～17:00

会場：竹の塚地域学習センター

講師：日本子ども学会常任理事、

保育の安全研究・教育センター 所 真里子 氏

子どもの事故の概要

○1歳～9歳の死因では「不慮の事故」が多い
→変わらない傾向が数十年続いている

○0歳は寝ている時の事故死が多い
→口や鼻が寝具や添い寝者の身体で
塞がれてしまう

○亡くなる事故
→0歳・・・窒息(89.9%)
1～4歳・・・溺水(45.6%)

ポイント 子どもは成長するから
事故に合う

- ◇ 発達の順番は、どの子も変わらない
- ◇ 発達のスピードは個人差がある

成長の過程で考えられる事故には
例えばこんなことが・・・



● ねんねの時期

寝ている時
うつぶせ寝
かけ布団
枕
ぬいぐるみ
スタイ

窒息

● ハイハイの時期 食べ始めの時期

口に物を入れる、首に何かが
引っかかる
ボタン電池・磁石・たばこ
シール・おもちゃ・食べ物
ひも

● つかまり立ち 歩き始めの時期

転ぶ、ぶつかる、倒れる
落ちる、挟む
段差・階段・テーブルの角
ドアに挟む・つまづく
やけど（アイロン・炊飯器・
ヒーター・ストーブ・ポット）

● 子どもの特性として・・・ ●

子どもの安全を
守るためには、
子どもの特性を
理解することが
大切です



「危ない」「注意なさい」という
抽象的な言葉では理解ができない

子どもは体の大きさに対して頭が
大きく、頭の方に重心がある



頭が大きい
頭が重い
だから！



ベランダから落ちる
下を覗きこんだ時に、頭の重みが
首に集中するため、頭が起こし
にくくなる→窒息する

子どもの目の高さは大人より格段に
低いため、視界が限られる

一つの物に注意が向くと、周りのもの
が目に入らなくなる



子どもと大人が見ている世界は同じ？

チャイルドビジョン（幼児視界体験メガネ）
で子どもの視界を体験できます。
東京都福祉局のHPからダウンロード
できます。

子どもの視野が想像以上に狭く、左右
を確認するにも、かなり首を曲げないと
いけないことが分かります。

「ヒヤリハット」ではなく ハザードに着目する



ハザードとは

「危なさ」そのものを意味する



2センチの段差は「大人」には大したハザードではなくても「歩き始めたばかり」の子にとっては深刻なハザードである。



危ないから片付けるのではなく、どうしたら危険ではなく使えるのか何が危ないのか、本質の理解が必要である。



子どもの安全には、保護者理解・協力が大切。
事故・ケガの予防について一緒に考えていく



子どもの手の届かない長さって？

手の届く長さ(目安)

1歳 90cm
2歳 110cm
3歳 120cm



台の高さ+手の届く長さ
=手の届く距離

子どもが乗り越えられる高さって？

(目安)	平均	最大
4歳	69.5cm	85cm
5歳	84.8cm	100cm
6歳	94.7cm	112.5cm



子どものどんな特徴が事故と関係するのか、子どもは大人に対してどのくらいの大きさなのかということや、子どもがよじ登る時に体をどのように使っているかといったことを、より詳しく知ることで子どもの安全対策の幅が広がります。

ハザードという観点から、園内を点検。各クラスのハサミに使い方、管理方法を危険がないか確認し、職員全体で周知。鉛筆は垂直に保管しているものや、移動する時の危険も含めて話し合い、回避できるようにした。

研修生の 報告書より

チャイルドビジョンを実際に作り、子どもと遊ぶときに使ってみた。視野が狭く、頭を左右に大きく動かさないと横も見えず子どもの見ている世界を知った。他の職員も体験し、見え方、感じ方の違いを知ってもらった。

子どもの発達理解が事故やケガの予防につながることを理解しているつもりだったが、その時に子どもがどのように体を使っているのか、ということを見る視点や理解が弱いことに気づき、学びになった。

職員会議で共有した他に、今安全面で気になっている場所を出し合った。劣化している遊具があると意見が出され、すぐに確認して取り外したり、誤嚥予防として再度玩具の形状やサイズの見直しのものを回収した。危険だと感じたことに対して、根拠たるものを考え、すぐに対応する意識が職場全体で高まってきている。